

ゆうかり放送委員会提供

ゆうかりに乾杯

第67回放送の概要 (2013年7月27日放送)

パーソナリティ

さくら (安本久美子)
タロウ (佃 由晃)
なかちゃん (中嶋邦弘)

コアラさんの地域瓦版

アコちゃん (三木文子)



ミキサー

門ちゃん (門田成延)
一ノ瀬悟

相談役

わだかん (和田幹司)

会計

小山俊則

(CM) 武井咲です。献血ありがとうございますの声が届いています。わかきみーなちゃん 8 才より。献血ありがとうございます、命をわけてくれて。ありがとうございます。生きるという贈り物。日本赤十字社。Love in action。

(CM) JR兵庫駅前の「神戸ルミナスホテル」、抜群のロケーション、最新の設備と最高のおもてなし、ビジネス、観光の快適な拠点として皆様のお越しをお待ちしております。1階コーロレではおいしいコーヒーや紅茶、おいしいランチやお食事なども楽しめます。今日は「神戸ルミナスホテル」様 (TEL:078-511-7700)のご協力を頂きました。

1. オープニング

今年の7月は非常に熱いが、梅雨が短かったことが影響しているように感じる。気象庁は45日間を標準的に梅雨の期間としているが、今年は6月8日が梅雨入り、7月8日が梅雨明けで半月(15日)も短かった。

2. ゲストコーナー(1): 林 五和夫さん (36 陽会)

本日のゲストは、4年前の2009年7月にご出演頂いた林 五和夫さんです。県庁退職後、兵庫県文化協会理事長、平成15年に神戸市文化賞受賞、平成23年兵庫県文化賞を受賞されています。

(1) 8月10日よりロードショーの始まる妹尾河童さん原作の映画「少年H」について、

原作者の妹尾河童さんと小、中学校が同級の林さんにお話を伺います。河童さんと林さんは長楽小学校(現駒ヶ林小学校)、兵庫県立第二神戸中学校(現兵庫高校)で一緒であった。長楽小学校は、FMわいわいの南、数百メートルである。小学校では相撲部のキャプテンで、横綱の林君として有名であった。河童さんは絵描き志望で、小磯良平さんの指導を受けた。小磯さんから、君は本格絵画より商業美術向きだと、大阪の朝日会館を紹介された。そこで描いたオペラのポスターが、オペラ界大御所の藤原義江さんに認められ、東京に出てくるよう誘われ、その縁で舞台美術家として大成した。

65歳になった時、日本を代表する評論家の立花隆さんに、戦前、戦中、戦後の自分の一生を話したところびっくりされ、自分の全く知らない社会だ、表面的な戦記などの歴史の記録はあるが、当時の日本人がどのような生活をしてきたかの記録は残っていない。河童さん、あなたが書きにくいところは小説として書いて残す義務がある、と背中を押され、震災を挟んで書き続けた。

戦禍が厳しくなった昭和18年(1943年)長楽小学校を卒業した。西須磨、諏訪山、平野などの小学校には同窓会があったが、長楽小学校の同窓会はなかった。卒業50年の同窓会を計画した。開催に必要な住所を知るため学校に行き、当時の学籍簿を見たいと頼んだが、当時の学籍簿には公開できないことも書かれているため、住所氏名のみ教えてもらった。知人に300人の名簿と同姓同名の人を、電話帳から取り出してもらったところ、90人がみつき、開催通知を発送した。同窓会には50数人が集まった。その同窓会に河童さんが、初めて神戸に帰ってきた。1993年の同窓会に参加した事が、本を書くはずみになった。出来あがった本は、震災2年後の1997年1月17日に出版された。

河童さんは、下町の小学校には珍しく垢ぬけしており、父親は洋服仕立人で、三宮で外人の服を縫っていた。母親は熱心なクリスチャンで、河童さんはキューピーさんのような顔をしていた。林は小学校時代から相撲が強く、当時はどの小学校にも土俵があり、年に何回か相撲の大会があった。4年生から相撲部に入り(赤ふんどし)、5年生は少し白くなり、6年生は本格的に白いまわしであった。長楽小学校を代表する選手になっていたのも、校長先生が相撲を見に来た時、林君は相撲が強いので喧嘩も強かろうと言われたが、私は土俵の上では強いですが、土俵を下りると私は優等生ですと返事した。相撲部の半分は元気者で、土俵の上では林の方が強いが、町に入ると喧嘩は手心を加えることがなく、参ったと言うことがないので、私は喧嘩はしませんと答えた。河童さんは暴力はとんでもないという環境で育ったので、どちらかと言うといじめの対象になる方であった。

河童さんの母親は厳しい教育ママで、子供の友達も選んでいた。そして林君とならいいと言っていた。河童さんの住んでいた西方面は須磨に近いので少し上品で、林さんの東方面は、西新開地に近いので荒くれが多かった。小学校時代は妹さんも一緒になって2階で転げまわって遊んだり、たまに絵を描いて競争していた。中学に入ると社会から大人として一目置いてくれる。当時の小学校から上級学校への進学率は20%程度で低く、中学にもランクがあり、林さんは長楽小学校では上位に入っていたので、河童さんと一緒に二中に入ることが出来た。林は小学校から相撲部、軍国少年で、入学するとすぐに上級生が来て、相撲部に来ると泣かされないと行って相撲部に入らされた。河童さんは好奇心旺盛で、乗馬部や射撃部などに入っていた。林はスポーツや教練の点数は良かった。河童さんは絵は上手であったが、スポーツは苦手であった。戦後、新制中学から新制高校に入る時に試験があるので、十五の春に泣く生徒がいた。このためある政治団体が「十五の春を泣かすな」といって高校全入運動が起こった。

河童さんは動物的カン、洞察力が素晴らしく、チャンスかダメかを見わける判断力があつた。8月15日の終戦を境に、それまでの先生の態度と、戦争に負けてからの手のひらを返すように変わった態度などをずっと見て、手のひら組を河童さんは人間的に失格だとして軽蔑した。変わらなかったのが松本先生、内藤先生であった。そのような先生の試験には一生懸命書いた。手のひら組の試験には、こんな先生に教えられる必要はないとして解答を書かず、白紙で裏面に左手の掌を描いたり、拳を描いたり、監督中の先生を描いたりして提出した。当時は1科目でも60点以下があれば留年ということになっていた。二中には変わった先生がいた。「ジャン公」というあだ名の数学の先生は、授業中にジャンバルジャンの「ああ無情」の話をした。左手で図面を書き、右手で数式を書くので尊敬されていた。その先生は河童さんについて、表0点、裏100点という評価をした。河童さんは出席日数が足りず、白紙の試験もあるので落第候補であった。それを救ったのが英語の松本先生と内藤先生と聞く。

少年Hは映画化が遅かったがその理由は、2時間を超えるような映画は配給が難しいため、河童さんはあの長編小説を2時間に収めることは出来ないので、映画化は無理と考えていた。TVドラマの場合は3時間にまとめたが、半分の小学校までしか描けなかった。前篇の評価がよかったので、後篇の二中篇ができ、6時間の作品となった。

最近になり水谷豊さんが、以前小説を読んだ時、この役は自分にピッタリであると考えていた。難しい時代にしっかりとした、味のある、人間味のある父親像、親子の控えめの愛などに惹かれ、この役は役者冥利に尽きるとして、河童さんに直訴した。水谷さんは奥さんの伊藤蘭さんにも読ませ、夫婦で映画化をしたいと思った。河童さんは以前から水谷さん夫婦を知っていたので、心が動いた。監督の降旗康男さんは、水谷さんが頼んで映画化が出来た。

少年H役の吉岡竜輝さんは、1800人のオーディションの中から1次～3次までの審査を行い、3次では、監督、主演二人、プロデューサー、原作者で審査し、全員が〇をつけたのが吉岡さんであった。彼は神戸魚崎在住で、神戸弁が出来た。吉岡さんは小柄の小学校6年生であったが、小学校3年生から17歳までの役をこなした。河童さんも案じていたが、見れば見る程良くやっていると感じていた。

3. ミュージックコーナ：サーカスフォーカス「描いて生きな素敵な show」

サーカスフォーカスという神戸出身の二人組で、アルバム ENTRANCE 中の「描いて生きな素敵な show」というポップな音楽です。ボーカルとキーボードの市君は、藤原紀香さんと結婚した陣内友則さんにピアノを教えた人です。見た目は今時のラッパーの感じですが、とても行儀のよい二人組です。

4. ゲストコーナ(2) 林 五和夫さん(36 陽会)

少年Hは世界4大映画祭の、モスクワ国際映画祭で1500の作品の中から6作品が選ばれ、授賞式で特別作品賞を受賞した。日本映画では初めての受賞となった。林さんが試写を2回見た感想は、原作を越えた素晴らしい作品に出来あがっていると思った。小説とTVドラマは小学校、中学校時代の学生生活が描かれている。映画では妹尾家のファミリーである本人、両親、妹を中心に、厳しい社会をどのように夢を忘れず生き抜いてきたか、難しい時代を強く、静かに、優しく生き抜いてきたかが良く描かれている。今の時代こそ見てもらいたい映画である。

(2) 戦前最後の沖縄県知事の島田勲さんをドラマ化した、TBSの『テレビ未来遺産“終戦”特別企画 報道ドラマ 「生きる」～戦場に残した伝言～』(8月7日よる9時放送)

林さんは「島田勲さんを語り継ぐ会」を作り、代表世話人として活動してきた。沖縄にパスポートを持って行く時代から関わってきた。沖縄との友愛運動や、沖縄に体育館を建設するための募金活動など、この問題に長く広く浅く関わってきた。武陽会には多くの人材がいるが、島田さんを越える人はいないと確信している。貝原知事は島田さんのように、県民の命と安全と財産を守るために命をかけて取り組むと言われた。TBS報道局の制作プロデューサーの藤原康延さんは武陽会(64 陽会)出身で、ドラマタイトルを「生きる」～戦場に残した伝言～としたのは、沖縄県庁が米軍に追われ、最後に県庁の機能がなくなった時に、島田知事は全職員を集め、県庁は解散するので、君達は夜陰に紛れて逃げろ、自分は警察部長と二人で残る。県職員に対し、逃げて一人でも多く生き延びて、将来の沖縄のために尽くしなさい、と伝え続けた島田知事のメッセージからきているようである。藤原さんが島田さんをどのように捉え、ドラマ化したのかを見るのが楽しみです。

(3) 皇后陛下から被災地に届けられた音楽会

阪神大震災時に、皇后陛下から被災地に音楽会が届けられたが、当時地元受入側の震災直後の取り組

みについて、昨日フジテレビからスタッフ 4 名が取材に来た。

阪神大震災後、イタリアトリノの福祉団体から、皇后陛下にお心のままに被災地にお役立て下さいと、高額寄付の申し出があった。非常に厳しい状況の中ではあったが、被災地に音楽や芸能を届けることになった。皇后さまから委託を受けた文化庁は、地元の受け入れが可能かどうかが一番であるとして、打診を受けた受け入れ側の協会の理事長林さんは、こんな時だから何としても頑張りますと回答した。1995年5月に第1回演奏会を開催し、1年かけて11公演行った。実施した演奏会ごとに事前計画、本番、聴衆の反応（アンケート）を皇后陛下に報告した。回を重ねるごとに、聴衆の開演前と演奏会後の表情が大きく変わり、その変化なども報告した。

演奏会終了後、演奏会全体について話を聞きたいと皇后陛下からお話があり、皇居に伺ったところ、天皇皇后両陛下と紀宮様が同席され、愛のコンサート「復興の街へ」の一部の演奏を聴いていただいた。終了後、1年延ばしの皇后さまの還暦の宮内庁主催のお祝いにも参加させて頂いた。そのあと、皇后様には、御所に関係者を招かれ、被災地でのコンサートの開催状況や、被災者の感動ぶりを1時間にわたって聴かれ、ねぎらいのお言葉をいただいた。

TV取材の目的は、天皇皇后両陛下が頻りに東北を訪問されているが、皇后さまは阪神淡路大震災の時から音楽で癒すことに関心をお持ちであるため、改めて阪神大震災当時の状況を調査に来たものです。

5. あこちゃんの地域瓦版

- ・映画「ガレキとラジオ」が8月3日～16日まで元町映画館で上映されます。これは宮城県南三陸町の災害ラジオ「FMみなさん」の取り組みを取り上げたものです。また、真夏の雪祭りが六甲山カンツリーハウスで9月1日まで開催されています。
- ・8月7日（水）よる9時から、戦前最後の沖縄県知事の島田叡さんをドラマ化したTBSの『テレビ未来遺産“終戦”特別企画報道ドラマ「生きる」～戦場に残した伝言～』が放送されます。
- ・8月10日（土）東宝系で、モスクワ国際映画祭特別作品賞を受賞した「少年H」（原作：妹尾河童）のロードショーが始まります。

6. 来月の予定

来月は神戸市広報専門官の松下麻里さんにお越し頂きます。

番組に対するご意見、ご感想はこちらまで：yuukarinikanpai@gmail.com